

# 北朝鮮と中国北斗衛星システム

漢和防務評論 20160203 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

諸々の状況から、北朝鮮の長距離ロケット砲が中段（ミッドコース）で衛星誘導技術を採用しているものと見られます。

その理由は、韓国軍によると北朝鮮の長距離ロケット砲の命中精度が格段に向上したからです。同様に北の弾道ミサイルも衛星誘導技術を採用している可能性があり、漢和は、命中精度の再評価が必要であると述べています。大気圏再突入実験については、イランで実施済みとしています。

最近の金正恩の自信に満ちた態度はここからきているのかもしれませんが。

KDR 香港特電：

2015年10月の北朝鮮軍事パレードで注目すべきものは、最新型長距離ロケット砲である。2011年以降の韓国軍の報道を見ると、北朝鮮が射程190乃至220KMのロケット飛翔体の実験を行ったと言うニュースが何度も見られた。これらの実験の目標区域は通常日本海である。朝鮮中央通信社（北朝鮮国営）は2014年7月15日、金正恩が新型ロケット兵器の発射実験を視察したとのニュースを発表した。ロケット砲は第171部隊が発射したものであった。2014年8月15日、朝鮮中央通信社は、関連のニュースを発表した。”労働新聞”によると：14日、元山外海に向けて4発の新型ロケット弾を発射した。誘導と操縦システムは最新の軍事作戦の要求を完全に満足させた、と。

この新型ロケット砲の口径は300MMであるか350MMであるか議論する価値がある。しかし口径がどうあろうと、韓国軍の推測する射程が正確であれば、北朝鮮はロケット飛翔の中段（ミッドコース）において衛星誘導技術を利用したことを意味する。慣性誘導だけであれば、220KMも飛行すれば誤差が大きく実戦では使えない。

本誌は：韓国軍は、イージス艦のレーダー及び長距離砲のレーダーを使うことによって、北朝鮮長距離ロケット砲の射程、弾着点、砲位を掌握できる能力があると考る。

本誌は、2005年から北朝鮮軍事技術者、軍人たちが、中国及びロシアの軍事装備展示会を参観する状況に高度の注意を払ってきた。彼らの関心の的は次の通り：北朝鮮人は、”北斗2”衛星（BD-2）に関する技術書を探し求めていた。その中には製品としての受信器も含まれる。これらの技術者の内の多数は、中国語、ロシア語を解した。彼らは、特別の任務を帯び、中国の各会社が開発した”北斗2”衛星の資料を収集した。

一部の”北斗”衛星受信器の生産企業は、私営企業であり、北朝鮮が事後関連製品を購入し獲得したかどうかは分からない。北朝鮮軍事工業製の装備品の構造からみると、もし大口径ロケット砲が中段（ミッドコース）で衛星誘導技術を利用しているならば、その技術は民用版の GLONASS 或いは BD-2 である可能性が最も高く、GPS ではない。

一旦北朝鮮の大口径ロケット砲が中段で衛星誘導技術を利用したとすれば、打撃精度（CEP）は大幅に向上する。中国が輸出する AR-3、AR-2 ロケット砲（MLRS）は、民用版の GPS を利用し、CEP は 50 M である。

もし上述の状況が真実であるとすれば、北朝鮮のノドン、SCUD シリーズの中距離、短距離弾道ミサイルの CEP は、再評価する必要がある。精度は、当然慣性誘導の弾道ミサイルに比べれば格段に高まるからだ。中国が輸出する射程 280 KM の M-20 型弾道ミサイルは、慣性誘導で CEP が 300 M、中段 GPS 誘導で CEP が 50 M である。

北朝鮮及びイランは、射程 3000 KM のムスダンシリーズ弾道ミサイルで中段に衛星誘導方式を追加した可能性がある。両国は、イラン国内で弾頭の再突入実験を行っており、この種ミサイルが実戦レベルに達した可能性がある。

以上